B.A.D. 短編集

白雪さんお幸せに

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『黒猫と、狐と、少年と』

旅をしていた狐は、ふと、黒猫が居なくなった事に気付きました。

千葉の街での、出来事です。

――――――――――にゃあ

どこかで猫が、鳴いている。

『古書店にて』

少年は、不思議な古書店に通っていました。
わけわかんねぇ方向から、なんでってことで、無理矢理救ってしまう彼と。
そんな彼に憧れた、一人の少年の話。

目次

黒猫と、狐と、少年 ―― 1
古書店にて ―― 5

黒猫と、狐と、少年

――――にゃあ

その時、猫が鳴いた。

雑踏に消えてしまう程に小さな声だったが、確かに、聞こえた。

車線を挟んで道の向こう側に居る、黒い猫の鳴き声だろう。静かに佇む姿は、誰かを待っている様にも見える。

――――にゃあっ

猫が、また鳴いた。

赤いリボンが結ばれた、綺麗な毛並みの猫だ。

何処かの飼い猫だろうか。脱走してきたなら、飼い主はさぞ心配している事だろう。首輪が無いのが、気掛かりだが。

信号が青に代わり、交差点で足止めされていた群衆が再び歩き出した。とは言え、此処は千葉の街。東京程の人数は居ないので、その黒猫に近づくのは意外と簡単だった。

猫は、小さな公園に居た。自転車を停め、降りる。

動物に特別好かれる訳でも、部長サマのような猫フリークでもない俺は、適当に撫で

るくらいしか出来ない。何処の猫かも分からないのに餌付けなんて出来ないのだ。
そのまま、無心でムツゴロウしていると、ふと視界が暗くなった。
すわ夕立かと慌てて空を見上げると、そこに居たのは、一人の少年。身長は俺とほとんど同じくらいか。たが決定的に違うのは、やはり髪色か。
なんでもないような表情に、少しだけ安堵の色を混ぜた少年は、金髪だった。
「ゆうり。勝手に居なくなるのは止めろと、何度も言っているだろう・・・・君も、うちのバカ猫が済まなかったね」
――――にゃあっ！
また、猫が鳴いた。バカ呼ばわりに抗議しているようにも見える。
どうにも不思議な猫だ。人の言葉が分かるのか、何なのか。
猫のような人間っぽい、猫。そんな印象を受ける。まあ、猫に人の言葉が分かる筈も無いので、ただの妄想にしかならないのだが。
「いえ。別に、迷惑かけられた訳でも無いんで。その、飼い主が見つかって良かった」
飼い主らしき少年は、ああと返すだけで、こちらへの興味を失ったようだ。どうにも、この少年も猫っぽい。
「ねえ、君」
「はい？」

猫を抱き上げ、面倒くさそうに撫でていた少年が、ちらりとこちらに視線を向けた。
「身の回りで、訳の分からない出来事があったりしないかい？」
心底面倒くさそうに、少年は俺にそんな事を聴いてきた。その顔は、妹にお使いを頼まれた俺の顔に似ていた。
「・・・・・・いえ。特には」
というか、この質問は何なのだろうか。強いて言うなら今年の春、ある部活に強制加入させられた事だろうか。
「そう、か・・・・・なら、その日常を出来るだけ長く、続けるといい。後悔の、無いようにね」
「・・・・・・はあ」
少年は、それだけ告げると、黒猫を連れて去っていった。
何だったのだろうか。質問も、その答えに対する反応も、無駄に意味深だ。自称俺の大親友なんかが好きそうな匂いもしたが。
気にしない事にして、公園の自販機で千葉県民のソウルドリンクを買う。
今日も、暴力的な甘さだった。

「・・・・・なんだい。これは。これがコーヒー？頭がおかしいんじゃないのか？」

少年は、どうもお気に召さなかったらしい。

古書店にて

とある古書店での話をしたいと思う。

俺が知り合った、彼らについて。

紅葉の木の傍に立つ店で、その人は毎日のんびりと働いていた。店に来客はあまりなく、給料も安いと言う。それでもその人は常に、楽しそうに働いていた。

俺には理解できないことだ。あれくらい楽そうな仕事ならまあやらない事もないかもしれないが、やはり給料は多い方がいい。

前職が地獄だったらしい。ブラックな職場にいたのなら、確かにこんなのんびりと働ける店は楽しいのだろう。その割に前職の知り合いが多いので、地獄ではあっても救いのある職場だったのだろう。……ブラックの常套手段だ。

その人を尋ねて、店には色々な人がやってくる。お嬢様然とした人が来た時には、彼の前職について詳しく聞きたくなった。まあ、聞いたところではぐらかされそうなのだが。

何か嫌な事があると、俺は必ずその店に向かった。お悩み相談をしている訳では無いが、やはりあの店は居心地が良いのだ。

本を買って、店を出ると必ず紅葉が目に入る。別段木々や草花が好きという訳でも無いが、綺麗なものを綺麗だと思える程度には素直であるつもりだ。……こう考えること自体がひねくれている証拠だろうが。

紅葉は、美しいより何だか物悲しい。綺麗ではあるが、ふとした次の瞬間にはハラハラと散って落ちていく。それが何だか、寂しかった。

＊＊＊＊

「お、今日も来たねー、少年」

「……うっす」

珍しく、小田桐さんが居なかった。彼は基本的に毎日ここに居るので、何曜日は休み、だとかは無かった筈だが。

「ダッキーは今いないよ。たまーにやってるお悩み相談に行っちゃったから」

「はあ……お悩み相談ですか」

「そーそー。お陰でなんの気兼ねもなくお菓子食べれるわー」

「……太っても知りませんよ」

「うっわ女の子にそんな事言うなんてガーヤンさいてー」

「そのガーヤンってのどうにかなりませんかね。俺にもセンス皆無だって分かりますよ」
「えぇー、いいじゃない別に減るもんでも無いし」
「ムーミンみたいで嫌なんですよ」
「ムーミン嫌いなの？」
「別に、嫌いでは無いですけど……」
「じゃあいいじゃん」
「……はあ」

＊＊＊＊

いつだって、何かが終わるのは寂しいものだ。
紅葉も、季節も、物語も……人も。
気づいた時には遅過ぎた。
いつの間にか、全てが変わって行くのだ。それにはきっと俺には気付くことが出来なかった理由がある。
それでも、納得出来ないと足掻くのだ。

変化に抗い、変わらないでいようとしても、この成長期の身体は、心は常に変わっていく。大した理由のない決意も、いつかは朽ちて、また新しい決意に取って代わられるのだろう。

それでも、その事に意味はあるのだと、俺は漠然と思う。消えてしまったものは、決して無くなる訳では無いと。

そう信じなければ、とても心が耐えられなかった。

家族が、交通事故で死んだ。

まあ、車社会に生きていれば、そこそこある話だろう。その事を認めてはいけないだろうが、まあ、ある程度仕方がない部分もある。

たった一人の妹が、唐突に居なくなった。

その日から、俺は泣けなくなった。笑えなくなった。怒れなくなった。

簡単に言えば、『生きる理由』とやらを見失ったのだ。

別にそんなものが無くとも生きては行ける。そこそこ勉強して、そこそこの高校に入り、そこそこの大学を出て、そこそこの企業に就職して、そこそこ老後の蓄えを貯めて、そこそこの歳で死ぬ。

人間的な生き方だ。口が裂けても理想とは言えないが、それでいいとも思う。

だから、俺はきっと、これから、この場所で、もう一度『生きる理由』ってやつを見つけるのだろう。

「あなたの問題を矯正してあげる。感謝なさい」

「……お前」

こんな、真っ直ぐなやつを見つけたのだから。

「な、なんでヒッキーがここにいんのよ!?」

「部室にいちゃ悪いか。ていうかお前誰」

こんな、優しいやつを見つけたのだから。

彼の話を、しようと思う。

馬鹿みたいにお人好しで、オカンで、そのくせ体育会系っぽいノリで。

わけわかんねぇ方向から、なんでっていうことで、無理矢理救ってしまう変な人。

そんな人に、俺も――――